

43 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業の報告

ー 作業活動を用いた介入の報告 ー

研究所 発達障害情報センター 車谷洋、深津玲子
理療教育・就労支援部 四ノ宮美恵子、遠藤明宏、
小林菜摘、高橋陽子、柴崎今日子、青柳政治
総合相談支援課 水村慎也 自立訓練部 植木朋子

【はじめに】青年期発達障害者への就労支援を行っていく中で、上肢の協調動作、手指の巧緻性が不器用であり、作業の正確性を優先するあまり、作業速度が遅くなっている症例を経験した。そのような青年期発達障害者の症例に対して、作業活動を通して手指巧緻性、作業速度への意識付けを行う介入の機会を得たので、その経過と結果を報告する。

【症例1】アスペルガー症候群、24歳男性。学歴は専門学校卒業。職歴は2年間印刷会社勤務の後、現在はアルバイト。併存障害はない。知能検査の結果はVIQ89、PIQ83、FIQ85であった。ADLは自立しており、拡大ADLも自立。上肢機能はSTEFが97/98点（右/左）、ペーデューペグボードテストが11/14/11/34（右/左/両手/組立）であり、上肢全体の協調性は保たれているが、巧緻性が低下している傾向であった。本症例に対して、週1回の頻度で作業活動を実施した。作業は切断、折り曲げ、組立の3工程からなり、作業実施時には、各工程をどのように実施するか事前にシュミレーションしてもらい、目標時間を設定の上、実施した。開始当初は目標時間通りの作業遂行が困難なことが多かったが、徐々に目標時間近くでの作業遂行が可能となり、作業速度が速くなる傾向があった。また、それに伴い、作業で使用する道具を必要に応じて選択できるなどの変化があった。最終評価におけるペグボードテストの結果は16/13/13/40（右/左/両手/組立）と右手と組立における巧緻性に向上がみられた。

【症例2】特定不能の広汎性発達障害、19歳女性。学歴は専門学校卒業。職歴はなく、アルバイト経験もない。併存障害として適応障害あり。知能検査の結果はVIQ86、PIQ68、FIQ75であった。ADLは自立しており、拡大ADLも自立。上肢機能はSTEFが90/92点（右/左）、ペーデューペグボードテストが15/14/11/30（右/左/両手/組立）であり、上肢の協調性、両手を使う巧緻性が低下している傾向であった。本症例に対して、週1回の頻度で作業活動を実施した。本症例に対しては、切断、糊付けの各作業工程の制限時間のみを設けて実施した。結果、制限時間を設けると作業速度が速くなる傾向が観察された。実施後のペグボードテストの結果は19/17/13/40（右/左/両手/組立）と巧緻性、作業速度に全体的な向上がみられた。

【考察】

青年期発達障害者2名への介入であったが、作業活動を用いた手指の巧緻性への介入を行うことで、巧緻性、作業速度に改善が認められた。作業実施時に注意した点は、ともに作業工程が完了するまでの制限時間を設けて、それを達成するために作業速度の増加を求めた点であった。結果、徐々に時間への意識が定着しつつあったものと考えられ、時間への意識が作業速度を高める要因となり、それに伴い巧緻性を要する能力が向上したものと思われた。